



「学び」かつ「思う」ために —中国古典学講義Ⅱにおける試み—

文学部 渡邊 大



専門は中国古典学。経学（儒教經典の解釈学、特に小学と呼ばれる文字学）、目録学（図書目録から、学術を辨章し源流を考鏡する、学問の学問）、清代考証学（実事求是を掲げる文献学）などを通して、儒教的価値観に強く規制されてきた前近代における中国の学問のあり方について考えている。（わたなべ だい）

大学の授業で何を身につけるのか？—教員としては「専門の学びを通して自分の頭で考える力」とこたえたい。論語に所謂「学（知識）」と「思（思考）」の両立[†]を目指して試行錯誤している中国古典学講義Ⅱについて報告し、大方の示教を乞うこととする。

[†]「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆うし」（『論語』為政篇）

1. 中国古典学講義の位置づけ

中国語中国文学科では、2年次より、A（中国語学・応用中国語）、B（中国古典・教養）、C（中国現代社会・文化）のうち、いずれかのコースに所属する。中国古典学講義Ⅰ（春学期）・Ⅱ（秋学期）は、Bコース2年次の学生を主たる対象とし、中国古典学概説を承け、また、3年次から始まる卒業研究を視野に入れつつ、各論（Ⅰは論語、Ⅱは史記）によって、中国古典に関する基本的知識とその研究方法について理解を深めることを目標としている。

2. 「読む」を考える

Ⅰでは、孔子の伝記と思想、論語の成立や伝流、解釈史、日本における受容などについて順次講義するが、Ⅱは、まず鴻門之会の講読から始める。受講生の多くが見知っている文章をあえて取り上げるのは、読むということについて考えるためである。漢字の意味が分かり、語と語の関係や句の構造を理解するのも読むことには違いないが、訳文を完成させただけでは本当に読んだことにはならない。たとえば剣舞の場面ひとつ取っても、范増は

なぜ沛公（劉邦）抹殺にこだわるのか、なぜ自ら手を下さず項莊を使い剣舞に言寄せようとしたのか、項王（項羽）はなぜ范増の目配せを黙殺しながら項莊の申し出には「諾」と応じるのか、項伯はなぜ剣舞の相手をするのか、劉邦はなぜ何も言わないのか、張良はなぜ宴席をはずして樊噲を呼びにいくのか、などと考えだすと、読むということが通り一遍ではすまないことに多くの学生が思っていたようである。

3. 「解釈」を吟味する

続いてNHK「その時歴史が動いた」で鴻門之会がどのように描かれているかについて検討する。番組では、項羽を武勇に秀でた大義の人、劉邦を知略に長けた寛仁の人とし、リーダーとしての両人を比較している。講読の際には、項羽の行動原理を快不快とし、劉邦は自らの失策で窮地に陥り、ただひたすらに張良、樊噲の活躍によって虎口を脱する（しかしその劉邦が後に天下をとることがよく分かるように書かれているのが鴻門之会の面白さである）と解説しておき、番組が項羽と劉邦に光を当てるあま

